



TITLE:

敘述形式からみた太公書「六韜」 の成立について

AUTHOR(S):

鈴木, 達明

CITATION:

鈴木, 達明. 敘述形式からみた太公書「六韜」の成立について. 中國文學報 2011, 80: 1-24

ISSUE DATE:

2011-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/201530>

RIGHT:

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について

鈴木 達 明

京都大学

はじめに

『六韜』は従来、「武經七書」の一つとして、主に兵書の枠組みの中で論じられてきた。一方で、『太公六韜』という別稱が示すように、『六韜』はまた「太公書」と呼ばれる周の太公望呂尙（以下「太公」と呼稱）の言行を記したテキスト群に属するものでもある。

他の傳世文獻の兵書と同じく、長らく先秦資料としての眞實性が疑われていた『六韜』であるが、前漢初期の資料である銀雀山漢墓竹簡（以下「銀雀山漢簡」と呼稱⁽¹⁾）の発見によって、「復権」を果たすこととなった。しかしながら、

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

銀雀山漢簡の中でも現行本と重なる部分はごく一部に止まっており、太公問答という形式において統一性のあるように見える現行本が、實は成立事情の異なるテキストの集合であることも明らかになったと言える。

本論では、『六韜』の太公書としての性格に注目する。敘述形式の面からその複合性を分析し、他の文獻との関連や特徴的な敘述形式の廣がりを通して、現在までの『六韜』を構成してきた諸要素について考察する。それによって『六韜』を定位することは、兵書という枠組みを問い直すためにも有効な試みであると思われる。

一 『六韜』について

最初に、『六韜』について、これまでの研究で明らかにされてきたことを簡単にまとめておきたい。⁽²⁾

『六韜』の書名と各韜の名稱は漢代の出土資料には見ることが出来ない。後漢末には既に流行していたと考えられるが、史書の著録では、『隋書』經籍志の子部・兵家類に「『太公六韜』五卷（梁六卷 周文王師姜望撰）」とあるのが

初出である。『隋書』經籍志では、他にも「太公」を名に含む書が九點出現している。『六韜』も含めそれらの淵源を、『漢書』藝文志・諸子略・道家類に著録される『太公』二百三十七篇（内譯は「謀」八十一篇、「言」七十一篇、「兵」八十五篇）に求めるのが現在の定説である。

それ以前には、『莊子』徐無鬼篇に「金板六弢」の語が見え、陸德明の『經典釋文』は、司馬彪・崔譔の「周書篇名」とする説などを引きつつ、それを現行本と同名の文・武・虎・豹・龍・犬から成る「太公六韜」に比定する説を唱えている。また『淮南子』精神訓には「金縢豹韜」（高誘注「周公太公陰謀圖王の書なり」）の語が見え、前漢以前に遡る可能性もある。韜名に關しては、『後漢書』何進傳李賢注に「太公六韜篇、第一霸典文論、第二文師武論、第三龍韜主將、第四虎韜偏裨、第五豹韜校尉、第六犬韜司馬」という記述があるが、文韜・武韜の名が無く、「文師」「校尉」「司馬」は現存する篇名に無い（あるいは「主將」は「立將」の誤りか）ことなど、現行本とは異なるところが大

きい。

現在完全な形で傳わる『六韜』は全て宋・元豐年間（一〇七八―一〇八五）に、武舉のために「武經七書」の一つとして校訂されたテキストの系統に屬する。本論では、「武經七書」中の他の兵書も含め、全て續古逸叢書所收の靜嘉堂藏本影印『武經七書』を底本とする。

但し「武經七書」本は、『六韜』と呼稱されるテキストの一端を傳えるに過ぎない。各種類書や出土資料の中には、「武經七書」に見られない『六韜』のテキストが多く存在しており、それらのテキストを參照することは、校勘のためのみならず、『六韜』の複合性を考える上でも必要不可欠である。そこで以下に、現行本以外のテキストを五つのまとまりに分けて整理しておく。

I類・漢簡類 銀雀山漢簡には、現行本の文韜・武韜と重なるものが七篇、その他の佚文が六篇含まれている（注(1)前掲書による）。また「論兵論政之類」君臣問答の「文王與太公」は、形制・字體の點で上記の十三篇とは異なるが、内容は文韜・明傳篇と重なっている。その他に、前漢後期

の定州八角廊漢簡（以下「定州簡」と呼稱）にも『六韜』（「太公」）に比定される内容が含まれている。その中には十ほどの篇題が見られ、三十一以上の篇数が存在したことが知られるが、多くが断片的である。⁶⁾ 現行本との重複部分はここでもほぼ文韜・武韜に当たっているが、龍韜の農器篇に當たる文が一條残る（226）他、佚文も多い。どちらの漢簡にも「六韜」や「太公」という呼稱や韜名は見られない。

Ⅱ類、『群書治要』 唐・貞觀五年（六三二）完成。卷三に『六韜』が收められる。篇名は無いが、豹韜を除く五つの韜名が見え、うち文韜と武韜は比較的現行本の状況と似る。一方、虎韜・犬韜の引用は全て現行本には見られないものである。底本には宮内廳書陵部影印本（古典研究會叢書・漢籍之部13『群書治要』第五冊、汲古書院、一九八九年）を用いる。

Ⅲ類、敦煌出土唐寫本殘卷 P. 3454（フランス國立圖書館所藏ペリオ蒐集敦煌漢文文獻）。以下「敦煌本」と稱す。書名・韜名は残っていないが、篇名の残る二十餘篇が含まれ、

うち半分ほどが現行本の文韜と共通している。残りの篇も對話の相手が全て文王であることから、現行本の文韜に相當する部分の異本である可能性が高い。

Ⅳ類、墨水城出土西夏語譯本殘卷 ⅡHB. No. 139-142、768-770（ロシア科學アカデミー東洋學研究所サントペテルブルグ支局所藏）。以下「西夏語譯本」と稱す。内容の理解は、林英津「西夏語譯《六韜》釋文札記」（遼夏金元史敎研通訊）二〇〇二年第五期）及び聶鴻音「《六韜》西夏文譯本」（傳統文化與現代化）一九九六年第五期）の解讀に依據した。聶鴻音氏によれば西夏乾祐年間（一一八〇年前後）の筆寫。「六韜上」「六韜中」の断片が残り、文韜と虎韜の完全な目録の他、文韜・龍韜・虎韜の一部の内容が見られる。目録の内容は、文韜は現行本と同じだが、虎韜では今本の十二篇に加えて、軍略篇と臨境篇の間に「二戰篇」、略地篇と火戰篇の間に「攻城篇」と漢譯できる篇が含まれる。前者は篇の内容も残っており、また聶氏は歸屬の不明な ⅡHB. No. 770 の殘卷を後者に比定する。

Ⅴ類、唐宋類書や注疏での引用 盛冬鈴『六韜譯注』

（河北人民出版社、一九九二年）及び周鳳五「六韜佚文輯存」（『毛子水先生九五壽慶論文集』、一九八七年）の整理を参考にした。

二 『六韜』の敘述形式

現行本、佚文の順に敘述形式を見てゆこう。現行本は六十篇から成るが、そのうち五十六篇は、太公が周の文王あるいは武王からの問いに答える問答體である。この問答は極めて形式的であり、問いはほとんど題目提起の役割しか無く、答えも意見を長々と説明的に述べるもので、『孟子』や『戰國策』のような、議論の應酬や意見を異にする相手への説得といった問答とは異なっている。質問者は、文韜と武韜では文韜の兵道篇を除き文王、兵道篇と龍韜以下は全て武王である。第三者が登場する例は、明傳篇の「太子發在側」⁽⁷⁾（太子の發が傍に居て）という部分のみで、そこでも太子發が會話に加わることは無く、對話者は太公と文王のみである。

「文（武）王問太公曰」。太公曰「」以外の地の文を含

むのは、文韜の文師篇、明傳篇、守國篇、武韜の發啓篇の四篇であるが、このうち明傳篇は「文王寢疾、召太公望、太子發在側」、發啓篇は「文王在豐、召太公」という文が前置きとしてあるのみ、守國篇は二つの對話の間に「王即齋七日、北面再拜而問之」（王はすぐに七日間齋戒し、太公に北面し再拜してからそれについて尋ねた）という簡単な行動の描寫があるのみで、問答がほとんどを占める。完全に説話體と言えるのは、太公望と文王の出會いを描き、『六韜』一書の冒頭に置かれる文韜・文師篇に限られる。

このように、ほぼ全ての篇が太公問答の形式をとっているが、その中で、虎韜・豹韜を中心に、やや特異な形式が見られる。それは彼我の軍勢の状況を細かく述べた上で、「爲之奈何」で締めくくり、どう行動するかを尋ねる武王の問いに對し、太公が極めて具體的な用兵法を答えるという問答である。以下は虎韜・動靜篇の例である。

武王問太公曰、「引兵深入諸侯之地、與敵之軍相當。

兩陳相望、衆寡彊弱相等、未敢先舉。吾欲令敵人將帥恐懼、士卒心傷、行陳不固、後陳欲走、前陳數顧。鼓

譟而乘之、敵人遂走。爲之奈何。」太公曰、「如此者（中略）戦合、鼓譟而俱起。敵將必恐、其軍驚駭、衆寡不相救、貴賤不相待、敵人必敗。」（懼・固・顧・魚部起・駭・待・之部）

武王が太公に尋ねた。「兵を率いて諸侯の地に深く侵入し、敵軍と對峙する。互いに遠くにらみ合うが、兵の多寡・強弱が等しいため、先に動くに動けない。このとき敵の將軍を恐れさせ、士卒の心膽を寒からしめ、陣を脆くさせて、後軍には逃げることはかり考えさせ、先陣には後ろを氣にして振り返ってばかりにさせたところで、太鼓を鳴らし閨との聲を擧げ、機に乗じて攻め、敵を敗走させたいのだが、どのようにすればよいか。」

太公は言った。「そのような場合は、（中略）敵とぶつかれば、太鼓を鳴らし閨の聲を擧げて一齊に攻めかけられます。すると敵將は必ず恐れおののき、軍勢は驚き怯え、各部隊は互いに救援せず、將帥も士卒も我先に逃げ、敵はきつと敗れます。」

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

この問答形式には、更にいくつかの特徴がある。まず上例のように、問いが「引兵深入諸侯之地」に始まるものが過半を占める。答えの方では、豹韜に限定されるが、「是謂林戰之紀」（林戰篇）・「謂之突兵」（突戰篇）・「是爲車城」（分險篇）のように特定の狀態にある軍勢やその時の戦術の名づけが頻繁に見られる。次に、傍點で示したように、問い・答えともに、不規則ではあるものの、脚韻を踏むことが少なくない⁽⁸⁾。もともと『六韜』は押韻句を多く含む文献であるが、問答體の問いの部分が押韻する例は珍しく、この形式の問答を除くとほとんど見られない。

このような形式の問答は、虎韜の軍用篇・三陳篇・壘虛篇を除いた他の九篇と、豹韜の全八篇に見られる他、文韜末の兵道篇後半、龍韜の陰符篇と陰書篇、犬韜首篇の分兵篇、末篇の戰歩篇後半にも現れている。部分的である文韜・兵道篇と犬韜・戰歩篇を除いても合計二十篇にのぼり、篇數としては『六韜』全體の三分の一を占めている。これを「狀況説明問答」と名づけて區別する。

次に『六韜』佚文について検討しよう。敘述形式を論じ

るに當たつては、佚文の中でも、先に整理したうちのⅠ-I類(Ⅰ類は銀雀山漢簡のみ)が中心となる。編聯案の當否や引用時の改編の可能性といった問題はあつたものの、ほ一篇のかたちを残しているためである。以下ではこれらを特に「佚篇」と稱する。

佚篇の中でも多くを占めるのは、やはり太公と文・武王の問答であるが、次のように説話形式の部分も見られることに現行本との違いがある。

- (1) 『群書治要』文韜の「武王伐殷、得二丈夫、而問之曰、殷之將亡、亦有妖乎」に始まる佚篇(底本一六六行)。滅亡直前に殷に起こつた怪異について二丈夫(V類の引用では多く「二大夫」とされる)が語る。敦煌本(篇名缺)にももう少し複雑な説話として見える。定州簡にも重なる斷片がある(注6)前掲書「釋文及校注」の注53參照)。
- (2) 『群書治要』武韜の「文王在岐周、召太公曰、爭權於天下者、何先」に始まる佚篇(底本二〇九行)。賢者を重く用いることが、天下の霸權を取るのに最も重要で

あるという太公の言葉を金版に記載し、人材を求めたことを述べる。一部が銀雀山漢簡・六と重なる。

- (3) 『群書治要』虎韜の「武王勝殷、召太公問曰、今殷民不安其處、奈何使天下安乎」に始まる佚篇(底本三六一行)。征服したばかりの殷の民の統治法について述べる。地の文はこの冒頭部分に見えるのみであり、實質的には問答體と言える。一部が銀雀山漢簡・九と重なる。
- (4) 『群書治要』犬韜の「武王至殷將戰、紂之卒握炭流湯者十八人」に始まる佚篇(底本三八〇行)。殷を伐つにあつて、殷の強大さと正當性におびえる武王に、相手は「殘賊」に過ぎぬと説き安心させる。
- (5) 銀雀山漢簡・十の葆啓篇。殘缺甚だしいが、下記(5)のV類の佚文を參考にすると、殷を伐つにあたり、不吉なことが起こつたため周公旦は武王を止めたが、太公の言に従つて軍を進め、牧野にて殷を破つたという説話と考えられる。
- (6) 敦煌本の周志篇。古の亡國について、その滅亡の理由と傳説を列擧する。『北堂書鈔』卷一一三や『路

史』國名紀六にも『六韜』として引かれるが、『逸周書』史記解とほぼ同じ内容である。『逸周書』との結びつきを示す點で重要だが、『六韜』の他篇とは全く異なつた文體であることから、『六韜』の一部として論じるのには疑いが残る。

説話體以外に、太公の言のみを記した語録體や直敘體の佚篇も存在するが、部分的な引用の結果としてその形となつてゐる可能性が高い。例えば、現行本の大禮篇・賞罰篇は、周鳳五「敦煌唐寫本太公六韜殘卷研究」（幼獅學誌）第十八卷第四期、一九八五年）が指摘するように、『管子』九守篇などに見える格言を太公問答の形式に再編したものであろうが、重なる内容の敦煌本（主用・大禮・啓明・遠視篇）では、問答體と直敘體が不揃いに現れており、敦煌本あるいはその底本が抜き書きをした時に敘述形式に亂れを生じた例と考えられる。

V類の佚文は、更に元來の敘述形式と切り離されておられ、語録體や直敘體の例を論じることが難しい。明らかな説話

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

體の例としては、上記（1）（5）と類似するものの他に、多くの文獻に様々なバリエーションが引用されるものとして次のような類型がある。

（5）佚篇（5）と同じく、卜占や氣象、周王（文王とするものが多い）の乗騎に不吉なことが起こつたため、家臣が殷への出兵を中止するよう進言するのに對し、太公が出兵を促し、ついには殷に勝つという類型の説話。出兵を諫める人物を、（5）と同様に周公とする『太平御覽』卷一三・三二八・三二九の他に、散宜生とする『藝文類聚』卷二、『太平御覽』卷一〇・卷三二八・卷七二六などがある。他に『太平御覽』卷三二九には、伯夷・叔齊が聖人のする行爲ではないとして止めるのを、太公が様々な徵候を瑞祥と解釋し、天の命ずるところであるとする、理由づけが逆轉した變種の例がある。

（7）桀王・紂王の豪奢な生活を述べるもの。『藝文類聚』卷六九・卷八五、『北堂書鈔』卷二〇、『太平御覽』卷三九三・七〇九・八一五では、豪華に着飾つた婦女を

侍らせたことを述べる。他に「紂は瓊室・鹿臺を作り、飾るに美玉を以てす」と建築の贅澤を言う『文選』西京賦の李善注所引や、有名な「炮烙の刑」を言う『文選』石闕銘の李善注所引も類似した例と言えよう。

(8) 文王(西伯)が羑里に囚われていたのを、太公と散宜生が珍品を紂王に献上して助けるといふ故事。献上したとされるものは大貝(『藝文類聚』卷八四、『太平御覽』卷八〇七など)、美女(『太平御覽』卷三八一)、名馬(『藝文類聚』卷九三、『山海經』海内北經郭璞注など)、黃熊(『藝文類聚』卷九五、『文選』南都賦李善注など)と多種にわたる。

以上の説話類の特徴は、第一に、ほとんどが殷周交代の前後を舞臺とした廣義の伐紂説話(殷周交代説話)であることである。上記以外に單獨の例しか見られない説話も多いが、それらにも同じ傾向が窺える。第二に、佚篇(一)から(五)に顯著であるが、説話の構成であつても問答が中心であること、第三に、V類の佚文では周公旦や散宜生、崇侯虎といった伐紂説話における有名人がしばしば登場す

ることである。その場合でも基本的には周王・太公問答が中心であり、(1)のように太公が登場しない例は極めて稀である。

狀況説明問答は、佚文のⅠ―Ⅲ類には全く含まれない。

Ⅳ類の西夏語譯本の佚篇として虎韜の一戰篇と HHB. No. 170 殘卷(虎韜・攻城篇と疑われる)があり、前掲の林英津氏・聶鴻音氏の研究によれば、どちらも狀況説明問答に近い形式であると考えられる。V類では、管見の限りでは、『太平御覽』卷二九四と卷三一一に現行本に無い狀況説明問答の例が見られる。但し、前者は西夏語譯本 HHB. No. 170 殘卷と重なる内容、後者は前半が『吳子』應變篇とほぼ同じ内容であり、いずれも類例のあるものである。

現行本と佚文を通した『六韜』の敘述形式の特徴は、次のようにまとめることができる。

1. 現行本では、文王・武王と太公の問答がほとんどを占める。明らかな説話は冒頭の文師篇の文王・太公遯近説話のみである。

2. 佚文では、問答の他に殷周交替にまつわる説話も見

られるが、多くの場合、その中心はやはり周王と太公の問答に置かれる。

3. 現行本の虎韜・豹韜を中心に状況説明問答が見られる。佚文中の例は極めて少ない。

以下では、『六韜』と密接な関係を持つ文獻と比較しながら、これらの特徴に反映される『六韜』の成立事情について考えてゆく。

三 その他の太公書

敘述形式の面で、『六韜』を特徴づけているのは、周王・太公問答と、それを中核とする説話であった。この形式は、端的に「太公書」としての性格を反映していると考えられる。

第一節に述べたように、『隋書』には様々な太公書が登場する。その中には、漢代以降の完全な創作も含まれるだろうが、基本的には『漢書』の『太公』を母胎として編集されたものと考えられる。現在、『六韜』以外の太公書は断片が傳わるのみであるが、嚴可均や洪頤煊らが輯佚を

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

行っており、諸太公書の間にしばしば混淆が見られることが既に指摘されている。⁹⁾ 班固の自注が「或有近世又以爲太公術者所増加也」（後世太公の術をおさめる者が加えたものを含むであろう）と述べるように、もともと『漢書』の『太公』も雜駁な内容であり、各太公書の混淆は當然起こりうることであったと考えられるのだが、それはいったいどの程度にまで及ぶもののだろうか。

次の表は、『太公金匱』について、嚴可均『全上古三代文』の輯佚に随って『六韜』及び他の太公書との重複について檢證したものである。上の數字は『全上古三代文』卷七の並び順に筆者が振ったもので、『金匱』の引用文も同書による。上段では全體が重なる時は冒頭部分のみを挙げ、「」で省略を示し、一部の重複の場合は當該箇所全體を挙げ、句點で結んでいる。下段、單に「」に引く佚文」というものは、全て『六韜』としての引用である。

漢代の定州簡を挙げたのは、各太公書が獨立する以前、『六韜』と『金匱』の内容が共存していた例とすることができる。

太公金匱	
1	唐堯克有苗、問人曰、吾聞有苗時天雨血沾衣、
2	三苗時有日暈。
3	三苗之時、三月不見日。
4	夏桀之時、有琴山之水、桀常以十月發民、
5	紂常以六月獵於西土、發民遂禽、
7	武王問太公曰、今民吏未安、何以安之。
8	守戰之具、皆在民間、
9	故夏條可結、冬冰可釋。
10	且天與不取、反受其咎。時至不行、反受其殃。
11	天道無親、常與善人。今海內陸沈於殷久矣。
12	武王師到牧野、陳未畢而暴風疾雨、
13	武王伐殷、丁侯不朝、
14	武王平殷還、問太公曰、如天如地。
15	武王伐紂、都洛邑。海內神相謂曰、
16	賞一人而千人喜者賞之。
17	屈一人之下、申萬人之上。武王曰、請著金版。
18	夫人可以樂成、難以慮始。
19	宰相不富國安主、調陰陽、和羣臣、
20	武王問師尚父曰、五帝之戒、可復得聞乎、
『六韜』や他の太公書としての引用	
1	定州簡 (0745) 「□曰、吾聞有苗雨血沾朝衣、是非有苗 (□は缺字)。
2	定州簡 (1175) 「有苗月蝕日斷、三日不解、是非□」に似る。
3	定州簡 (3228) 「有苗三日不見日、是非有苗之□耶。對。『路史』卷三。
4	敦煌本距諫篇。
5	敦煌本距諫篇。『太平御覽』卷一一に『太公伏符陰謀』として引用。
7	『太平御覽』卷三七の引く佚文。
8	龍韜・農器篇に似る。
9	『藝文類聚』卷八八、『太平御覽』卷二二に引く佚文。
10	龍韜・軍勢篇「失利後時、反受其殃」と似る。
11	『太平御覽』卷三三九・同卷五六に引く佚文。(5) 参照。
12	9と同じ佚文。
13	『太平御覽』卷七七に引く佚文。
14	『太平御覽』卷三七に引く佚文。
15	内容を要約した形で『舊唐書』禮儀志に『六韜』として引用される。
16	龍韜・將威篇に似る。また全體が『群書治要』卷三二の『陰謀』に見える。
17	『群書治要』に引く武韜佚篇。第二節(2) 参照。
18	9と同じ佚文。
19	文韜・上賢篇。
20	『六韜』の佚文には無いが、『群書治要』卷三二の『陰謀』に見える。

『全上古三代文』に引く『金匱』の佚文は計三十九條に及ぶが、第24條（「門之書曰」）以降は、兵陰陽的占星術である第33條・34條の他、周王・太公の名の見えない箴や短い銘、『開元占經』のみに引かれる卜占の解説であり、太公書の例として疑いが残る。それを除いた範囲では、實に半數以上が、『六韜』や他の太公書としても引用されていることがわかる。表現形式の點では、9・11・18が、（5）の伯夷・叔齊の見える變種として引いた一連の説話に含まれる他、12と14も説話であるが、その他は『六韜』の重複箇所を見ても、實質的には問答體であると言える。

元來、各太公書の間には性質の違いがあつたはずである。例えば上表12・14は『太公金匱』としての引用がほとんどを占めており、第24條以下の傾向も加味すれば、『六韜』に比べ、『金匱』には神祕的・呪術的な内容や、箴・銘・説話の形式に傾く性質があつたと考えられる。ただ14などは、武王の即位後に天下の神々が訪ね来て王を試すのを太公が計を用いて對處するという志怪小説に類する説話であり、六朝期以降の成立の可能性が強く疑われ、それらの例

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

にどこまで『金匱』本來の姿を求めることが許されるかは、難しい問題である。

結論としては、漢代以來の傳承の過程で、それぞれの太公書が互いに交錯しながら傳えられてきた結果、後世の類書などに引用される時の「太公某」という書名は、『隋書』の著録と必ずしも對應したものではなくなっていたと考えるべきであろう。そこから『漢書』の『太公』での「謀」「言」「兵」への歸屬をうかがい知することは極めて困難であると言わざるをえない。

敘述形式から見ると、これらの太公書は、周王と太公の問答あるいは太公を主人公とした伐紂説話という點で『六韜』の諸テキストと共通している。それは、この敘述形式が、相互の交錯を招く大きな要因であつたと同時に、恐らく傳承の過程での「太公書」の枠組みを支える重要な要素であつたことを示すものと考えられる。

注目すべきは、『六韜』としての引用が、他の太公書と比べて際だつて多く、第14條のように全く兵書的とは言えない内容も、正史において『六韜』として引かれているこ

とである。ここから、「武經七書」として編纂される以前に、『六韜』が、太公書の總稱的な意味で扱われる場合があったことが推測される。

一方、ほとんど『六韜』とは交わらない太公書も存在する。

敦煌寫本の中に『太公家教』と稱する童蒙書（兒童教育に用いられた教訓書）がある。¹⁰ 四字句で隔句押韻する暗誦に適した形式で、卑近な處世訓を述べるものであり、問答體でもなく、内容も政治論・軍事論が中心の『六韜』とは全く異なっている。

この書名の「太公」については、太公望を指すとする説と尊屬の稱謂とする説に意見が分かれている。ただ、『太公家教』としばしば同一紙片に書寫される『武王家教』という童蒙書が、武王と太公望の問答の形式で書かれており、この兩者を合わせて「太公家教」と稱されることも多いことから、元來の呼稱の由來は別にしても、太公望と關わる著作として受容されていたことは明らかである。兩書の寫本に見える書寫年代は、ともに九世紀半ば以降のものである。

り、押韻・語彙・他の文獻との關係から、成書の時期もそれほど遡ることはないとされている（注¹⁰の諸研究參照）。『太公家教』は敦煌寫本中に五十種弱、『武王家教』も九種が見つかっており、當時廣く流行していたことが知られる。おそらく唐代の中頃には、太公書の範圍が更に擴大し、從來の太公問答や太公說話という形式から逸脱しても受容される狀況が出現していたのであろう。

『太公家教』は、敦煌寫本の『文詞教林』や『新集文詞九經鈔』、また明代の『明心寶鑑』といった教訓的類書にも、「太公曰」として多く引用されている。¹¹ 形式だけを見れば、『六韜』にも四字句・隔句押韻が多いこともあって、太公の回答の一部として混同が生じて不思議はないように思われる。しかしながら、それらの引用に現行本・佚篇を含めて『六韜』の文章と重なる例はほとんど無い。¹² 他の佚文を含めても、『初學記』卷一八に引かれる「十盜」について述べる『六韜』の佚文が、『武王家教』の冒頭に見える「十惡」と重なる例が一つあるのみである。また『文詞教林』と『新集文詞九經鈔』には、各三例「六韜云」と

いう引用があるが、『文詞教林』の序中の引用を除き、いずれも現行本や『群書治要』佚篇に含まれる『六韜』の文であり、『太公家教』等とは重なっていない。それに對して、引用書の年代が東晉以前であることから、比較的早期に成立したと考えられる。1380（大英圖書館所藏スタンブリッジ敦煌漢文書）の『應機抄』では、「太公曰」としての引用の中に、『太公家教』『六韜』『金匱』に見えるものがそれぞれ少量ながら含まれており、混淆した状態が窺える。¹³

以上の状況から、唐代の中頃において、『六韜』は、既に一定の權威を得ていた太公書、いわば「古太公書」の總稱としての性質を廣義では持ちながらも、同時に他の太公書と區別される狹義の『六韜』としても固まりつつあったと考えることができる。

四 『逸周書』

第二節の（6）でも觸れたように、『逸周書』もまた、太公兵法に源を發する軍事論を含み、『六韜』と繋がりを

持つとされてきた文獻である。¹⁴ 最近の研究では、谷中信一『齊地の思想文化の展開と古代中國の形成』（汲古書店、二〇〇八年）第二編第一章「太公望と『逸周書』」（一六三―一九一頁）が、『逸周書』における「太公」の出現状況、また『六韜』と『逸周書』の共通箇所分析を通して、全體にわたる検討を行っている。

谷中氏の論文では、現行の『逸周書』での太公の登場数ごく僅かであり、またその位置や役割も曖昧模糊としたものであることを明らかにした上で、『六韜』と『逸周書』に多くの共通する語句が見られることから、その共通の祖先として「原『周書』」を想定し、それは、特定の編集意圖に基づくものではなく、殷周革命にちなむ「誥誓號令」の類や、それ以降の同様な古記録、關連する教訓・傳承などが收められたものに對する汎稱であるとしている。

このような原「周書」の捉え方と、その上で『六韜』の方が編者による作爲が多く爲されているとする説には、筆者も基本的に同意する。ただ、『逸周書』との關係性が、あくまで『六韜』の一部に限定されることには注意する必

要がある。

同論文では『逸周書』と『六韜』の共通箇所として、明らかな例を十條舉げてゐる。その他に陳逢衡・劉師培らの指摘に基づいた、可能性が高いと思われる共通箇所も九條舉げてゐるが、こちらは一例（同論文の番號で⑮）を除き、いずれも意味上の繋がりや個々の語句の類似であるため、本論での検討では用いない。

この共通箇所にかかる『六韜』は、二條（同論文⑦と⑱）以外は全て文韜・武韜の文である。例外となるこの二條は、ともに『群書治要』に虎韜として引かれる佚篇（第二節の（3）に屬する。これは銀雀山漢簡にも含まれ、漢代以前から存在したテキストではあるが、状況説明問答や具體的な軍事に關する記述からなる現行本の虎韜とは大きく異なっており、内容も政治論であつて、現行本と比較するとむしろ文韜・武韜に近いものである。

この類似部分の偏りは、『逸周書』と祖先を共にしている範圍が、現行本『六韜』の全てに及ぶわけではなく、ほぼ文韜・武韜に限定されたものであることを示している。

それに加えて、從來指摘されていたのとは異なり、『逸周書』における『六韜』との共通部分は、兵書的部分にむしろ少なく、更に周代の金文に似た文體を持つ最古層の部分に至っては全く見られない。¹⁵ここから、『逸周書』の兵家言を單純に太公兵法に基づくものとは言えないこと、『六韜』のテキストは、現在の『逸周書』に收められている最古層のテキストほど古い時期にまで遡ることはできないことがわかる。

敘述形式の面でも差違が存在する。『逸周書』には様々な敘述形式が含まれており、説話の舞臺も成王即位以降であるものも多く、文王・武王期であつても伐紂故事と關わりのない場合がある。問答を中心とする篇であつても、『逸周書』では最初に『尚書』に似た表現で日時・場所などの状況を示す言葉が入ることが多く、一つの特徴ともなつてゐるが、『六韜』にはほとんど見られない。

『逸周書』での太公の影は極めて薄く、『六韜』と好對照を成している。この原因として谷中氏は太公望の顯彰に關わる編集意圖の違いを重視しているが、むしろ原「周

書」から太公を主人公とするテキストが切り離された結果を反映していると考ええる方が自然ではないだろうか。そこで切り離されたテキストが『太公』となり、現在の『六韜』の文韜・武韜の中に傳わっていると考えられる。

『逸周書』に見える問答や説話には、對話の相手が太公に変わった形の異文が存在するものがある。谷中氏は、『逸周書』官人篇と『大戴禮記』文王官人篇及び龍韜・選將篇、『逸周書』度邑篇とその佚文を挙げている。他に周鳳五「敦煌唐寫本太公六韜殘卷研究」（本文前掲）も『逸周書』文傳解と文韜の明傳篇の冒頭部分の類似性を指摘している。盧文弨の校訂により『逸周書』のテキストを改めた上での比較ながら、明傳篇冒頭は、第三者（太子發）の存在が提示される例外的な部分であり、原「周書」の痕跡として興味深い。これらは、原「周書」との繋がりを示すと同時に、『六韜』における太公の役割の重要性を示すものでもある。

五 冒頭に置かれる説話について

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

以下では、『六韜』に特徴的な敘述形式の廣がりとその特性について、他の先秦文獻との比較を通して考える。

現行本『六韜』では、冒頭の文韜・文師篇が事實上唯一の説話體であつた。文師篇は、銀雀山漢簡や『群書治要』にも含まれる、古い由來を持つ部分である。

『武經七書』の中では、『吳子』の最初の圖國篇冒頭に比較的長い説話が見られる。『吳子』には他にも説話體の文章が含まれるが、圖國篇の説話は、吳起の仕官という傳記的な内容の點でも、『六韜』と共通性を持つ。他に、全體としては直敘體からなる（但し一部に「臣聞」「臣以爲」の語が見られる）『尉繚子』でも、第一篇の天官篇のみが問答體である。説話體ではないものの、そこでの梁惠王との對話が、唯一「尉繚」の名が現れる部分であり、尉繚という人物とこのテキストとを結びつける役割を擔っている。

出土資料の兵書では、上海博物館藏戰國楚竹書の『曹沫之陳』でも、説話體が問答體に先んじて冒頭に置かれている。簡牘資料は様々な編聯案が考えられ、銀雀山『六韜』のように順序を決定しがたい場合も多いが、標題も残る

『曹沫之陳』については、この冒頭の説話の位置は各研究者の間で一致している。⁽¹⁶⁾ また、銀雀山漢簡『孫子』佚篇の見吳王篇（この篇名は整理者が假につけたもの）は『史記』の記述と重なる孫武の傳記的説話である。銀雀山からは『孫子』の篇名が記されたとおぼしき木牘が見つかっているが、この上部の殘缺部分に見吳王篇に當たる篇の名稱が入っていた可能性も否定できない。⁽¹⁷⁾ もしそうであれば、銀雀山漢簡の『孫子』も同様の形式であつたことになる。少なくとも前漢期には十三篇に説話體の文章が付いた形の『孫子』が流布していた可能性が高い。

これらの傳記的内容は、いわば一種の「序」に當たるものと言える。周知の通り、先秦から前漢にかけての文獻では、『莊子』天下篇や『淮南子』要略篇など、「序」に類する部分はむしろ末尾に置かれていることが多い。『韓非子』（首篇の初見秦篇あるいは第一篇の存韓篇）のように、冒頭に見られる例もあるが、どちらにしても、一般的には漢代以降の編集時にその位置が定まったと考えられている。

しかしながら、『曹沫之陳』は戰國時代後期の出土資料

であり、また『尉繚子』と『六韜』は、『群書治要』の引用でも同じ位置に置かれている。更に『黃石公三略』や『唐太宗李衛公問對』など、漢代以降に作られた兵書にはかえつてこの形式が見られない。以上から、冒頭に「序」的な説話あるいは問答を置く形式は、先秦の兵書における敘述形式上の特色を伝えるものであると考えられる。

六 狀況説明問答について

第二節で見たように、狀況説明問答は、質問者（武王）が彼我の狀況を細かく説明した上で「爲之奈何」などで締めくくる問いを發し、回答者（太公）が具體的な用兵法を答えるという形式の問答であつた。

同様の形式の特徴を持つ問答は、他の兵書や兵家言にも見ることができる。以下では形式を示すために原文を引用し、押韻箇所を示す。出土資料は、底本の釋讀を反映し、重文符號と合文符號を文字に直した後のテキストのみを記し、墨丁・墨鉤などは省略する。

まず、『吳子』の論將篇末尾の第五段と、應變篇のほぼ

全體（末尾の語録體部分を除く）が狀況説明問答である。應變篇の方は九條にわたって連續するが、各質疑の關連性は薄い。質疑とも『六韜』よりも短く、問いの多くは四五句程度の四字句で作られる。以下は應變篇の第六條である。

武侯問曰、「左右高山、地甚狹迫、卒遇敵人、擊之不敢、去之不得、爲之奈何。」起對曰、「此謂谷戰、雖衆不用、募吾材士、與敵相當、輕足利兵、以爲前行。分車列騎、隱於四旁、相去數里、無見其兵。敵必堅陳、進退不敢。於是出旌列旆、行出山外營之、敵人必懼、車騎挑之、勿令得休、此谷戰之法也。」（當・行・旁・兵：陽部）

次に銀雀山漢簡「孫臏兵法」威王問篇の前段、威王との十條にわたる問答の前半部分に、狀況説明問答と思われる形式が認められる。『吳子』以上に短文ではあるが、第一問答以外には「命曰」のようにその對應法を名づけた上で説明する方式が見られ、これは『六韜』の豹韜などと似るものである。次に引く第一問答は（258簡～259簡）、傍線部分が『吳子』論將篇第五段と類似する。

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

齊威王問用兵孫子曰、「兩軍相當、兩將相望、皆堅而固、莫敢先舉、爲之奈何。」孫子答曰、「以輕卒嘗之、賤而勇者將之、期於北、母期於得、爲之微陣以觸其廐（側）。是謂大得。」（當・望：陽部。固・舉：魚部。嘗・將：陽部。北・得・廐：得：職部）

銀雀山漢簡では他に「論兵論政之類」十問篇にもこの形式が見られる。冒頭の「兵問曰」を除き質問者・回答者を示さず、「交和而舍」（軍門を開き對陣して）に始まり、「擊此奈何」「擊之奈何」で終わる問いと、「曰、擊此者」で始まり「此擊之道也」で締めくくられる答えが連續する。以下は第一問答（1556簡～1558簡）。

兵問曰、「交和而舍、糧食均足、人兵敵衡、客主兩懼。敵人圓陣以胥、因以爲固、擊此奈何。」曰、「擊此者、三軍之衆分而爲四五、或傳而佯北、而示之懼。彼見我懼、則遂分而不顧。因以亂毀其固。四鼓同舉、五隊俱傳。五隊俱至、三軍同利。此擊圓之道也。」（懼・胥・固：魚部。五・懼・顧・固・舉・傳：魚部。至・利：質部）更に『通典』卷一五九と『孫子』何延錫注に引かれる

『孫子』の佚文に、「吳王問孫子曰」(『通典』では「吳王」を吳子とする)に始まり、九地篇に擧げられる地形での實際の用兵法を孫子が述べる問答およそ十二條があり、狀況説明問答の形式に似る。¹⁸⁾しかしながら、押韻箇所が少なく、また中古音による押韻の可能性があること、内容でも、『六韜』が戰車・騎兵・歩兵・弩弓をまんべんなく用いるのに對して「車」の重要性が低下していることなどから、その多くは漢代以降、かなり降る時期に制作されたものと推測される。¹⁹⁾

最後に諸子文獻では、城郭の防衛法を説く『墨子』備城門篇以下の十一篇中の問答體部分(備城門篇・備高臨篇・備梯篇・備穴篇・備蛾傳篇・雜守篇)がこの形式である。²⁰⁾備城門篇のみやや異なるものの、おおむね孫子の禽子(禽滑釐)が「再拜再拜」あるいは「再拜頓首」して「敢問、爲之奈何」と、ある狀況下での防衛法を尋ね、墨子が「子問、邪」と禽滑釐の問いのテーマを確認した上で話し出すという構成をとっている。備梯篇・備蛾傳篇をはじめとして、問いの部分にしばしば押韻箇所が含まれる。次に引くのは

備蛾傳篇(『墨子問詁』卷一四)の例である。

禽子再拜再拜曰、「敢問適(敵)人強弱、遂以傳城、後上先斷、以爲淑(法)程、斬城爲基、掘下爲室、前上不止、後射既疾、爲之奈何。」子墨子曰、「子問蛾傳之守邪。蛾傳者、將之忿者也。(以下略)」(城・程：耕部、室・疾：質部)

質問部分の長短に違いはあるが、同様の問答が連續して使用されることや押韻の多さからも、以上の諸例はほぼ同一の形式であると言える。注目すべきは、戰場の種別や彼の戰力差の設定が似たものや、使用される語句(「兩軍相望」「敵衆我寡」「莫敢先舉」など)にも共通するものが多いにもかかわらず、他の引用と考えられるような重複がほとんど見られないことである。數少ない重複例として、先に引用した「孫臏兵法」と『吳子』論將篇、また『太平御覽』卷三一一の『六韜』佚文と『吳子』應變篇第二問答があるが、一般に類似したフレーズや文が重複して見られることが多い兵書において、この個別性の高さは特筆に値す

る。

第二節でも述べたように、状況説明問答は、佚文独自の例が二つしか見られず、しかもそれらは『吳子』と重複するものや虎韜の一篇と疑われるものであった。現行本と重なる引用としても、Ⅰ―Ⅲ類には全く含まれず、Ⅴ類でも、『通典』にこそ複数の例が引かれるが、その他の唐代の類書や諸注釋では、管見の限り、明らかな例は、『北堂書鈔』卷一一四、『太平御覽』卷二七一での龍韜・陰符篇の引用と『太平御覽』卷三二での虎韜・疾戰篇の引用のみである。

状況説明問答の引用例がかくも少ないのは、形式や内容によるところもあろうが、やはり『六韜』のその他の部分、特に文韜・武韜とは異なる由來を持つためと考えるべきであろう。但し、銀雀山漢簡や『墨子』にも見られることから、漢代以前にも一定の流行をした敘述形式であったと考えられる。

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

七 結 論

ここまでの検討の結果、現在までの『六韜』の成立と展開について、敘述形式を軸として次のように推測することができる。

A. 先秦時期に、谷中氏の言う“原「周書」”に當たるテキスト群が存在した。それは周代を舞臺とした君臣言行録から歴史記錄まで、様々な性質のテキストの總稱であり、西周時代以降長い時間をかけて蓄積されたものであった。この中には、現在の『逸周書』の中核部分の他、現行本『六韜』の文韜・武韜に當たるテキストや、漢簡中の佚文に見える太公說話などが含まれていたが、虎韜以降の大部分、特に状況説明問答の形式の諸篇は含まれていなかったと考えられる。

B. 漢簡の状況から、前漢の初めには、既に原「周書」の中から太公望に關わるテキストのほとんどが切り離され獨立していたと考えられる。それを祖形として、更に原「周書」以外のテキストが流入したのが、『漢書』藝

文志の『太公』となったのであろう。その中身は、周王・太公問答と殷周交代期を舞臺とした説話を中心としていた可能性が高い。

C・遅くとも後漢末には『太公六韜』という名稱の文獻が存在し、隋代の初めには、文・武・龍・虎・豹・犬韜からなる『太公六韜』が成立していた。六朝期を通して『太公』の再編が進み、新たな内容も加わって、『隋書』經籍志に見える様々な太公書が生まれた。各太公書は、もともとは用兵・謀略・占術など内容上の傾向において獨自性を有していたと考えられるが、形式面では太公問答・太公説話（特に前者）を中心とする點で一定の共通性があった。

D・この敘述形式上の類似性に起因して、おそらく成立當初から、各太公書に含まれるテキストは相互に出入を繰り返していたであろう。唐代の類書などからは、『六韜』がその中心に位置し、太公書の總稱として扱われていたことが窺われる。唐代中頃には、『六韜』と混合可能な太公書の範圍に一定の區切りができ、狹義の『六

韜』の固定化も進みつつあった。

E・宋・元豐年間に「武經七書」が校訂整理され、現行本のテキストが成立する。この段階までに説話類の削除や問答體への整形などの修改が施されたと考えられる。

この校訂は武舉試験のためのもので、徐勇・邵鴻「『六韜』綜論」（『濟南大學學報』第二卷第3期、二〇〇一年）では、慶曆七年（一〇四七年）の詔「自今策試武舉人、毋得問陰陽諸禁書」（今後武舉の試験では、陰陽など諸々の禁書について問いに出してはならない）に基づき、軍事と關係が薄い部分と神祕的な色合いの強い部分が大量に削られたと推測している。但し、別系統のテキストを伝える西夏語譯本が、文韜・虎韜に關しては虎韜で二篇多いのみであることから、「武經七書」校訂時の編集は限定的だった可能性もある。この後、西夏語譯本を例外として、他の系統の『六韜』は亡佚してしまう。

以上の過程の中で、狀況説明問答の諸篇がいつ流入したのかは定かではない。他の兵書の例からも、元來のテキス

トは漢代以前に成立していた可能性が高いが、『六韜』佚文の状況から考えると、『六韜』への本格的な流入は隋唐の間（C・D）に降ると思われる。西夏語譯本の虎韜佚篇にも類似した形式が見られることは、虎韜とこの形式との結びつきが、現行本に特殊な事情ではなかったことを示している。

各韜の名稱と内容の對應、またその變遷については不明な點が多いものの、西夏語譯本の状況や『逸周書』と文韜・武韜との關係などから、現行本の各韜の区分には、テキストの性質や由來が一定程度反映されていると考えて良い。但し、文韜・犬韜で例外的に狀況説明問答を含む部分（文韜の兵道篇後半、犬韜の分兵篇と戰歩篇後半）や、『群書治要』では武韜に含まれる龍韜の論將篇・選將篇など、各韜の冒頭・末尾には、現在の歸屬の妥當性が疑われる部分が集中して存在している。

本論では龍韜と犬韜についてほとんど觸れてこなかった。この兩韜は敘述形式・内容ともに折衷的な部分であり、詳しくは今後の研究をまたねばならないが、その性質と他の

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について（鈴木）

四韜との關係について、本論での検討から窺える範圍での見通しを簡単に述べておきたい。

龍韜の内容は、前半は特に將帥論が中心となり、後半は道家的な軍事論（軍勢篇）、また五行に基づく用兵（五音篇）や望氣論（兵徵篇）など兵陰陽的な用兵法が述べられる。

政治論・王者論が中心の文韜・武韜と比べ、理論的ではあるが純粹な軍事論が大勢を占める點で異なる。また『孫子』など、他の兵書との類似部分が特に多く見られることが大きな特徴である。その分『六韜』としての獨自性は文韜・武韜よりも低いと言えるが、『群書治要』で武韜として引用される例があること、初唐の類書にしばしば引用されること、諸太公書と重なる記述も多いことなどから、『太公』まで遡れる部分を多く含むと考えられる。

犬韜は、兵種ごとの選拔法やその運用、兵卒の訓練法など、制度面・運用面についての具體的な軍事論が中心となっている。制度という點では虎韜の軍用篇など、運用という點では狀況説明問答の諸篇に近く、敘述形式の違いはあるが、虎韜・豹韜に比較的近い内容と言える。なお武鋒

篇は『吳子』料敵篇と類似し、教戰篇も『尉繚子』兵教上篇・『吳子』治兵篇と似た内容であつて、特に軍事制度に關わる部分においては、龍韜と同様に他の兵書との重複が多く見受けられる。

これまで見てきたように、様々な要素が長い時間になつて出入を繰り返す中で、太公書としての『六韜』を支えるのに重要な役割を果たしたのが、問答體という敘述形式であつたと考えられる。

『六韜』のような極めて形式的な問答體は他の文獻にも散見される。そこに求められていた機能は、一つにはその書が假託された思想家と對話者の問答の形を取ることで歸屬を明確にし、その人物の權威によつて説得力を増強するというものであつたことは間違いないだろう。⁽²³⁾

しかしそのみに止まらず、このような形式的な問答體によつて自らの枠組みを支えるという敘述方法が、ある特定のテキスト群（あるいは著者集團）において、流行・傳承されていた可能性があるように思われる。その検討をもつ

て今後の課題としたい。

註

- (1) 銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』（文物出版社、一九八五年）及び同『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』（文物出版社、二〇一〇年）を参照。篇名や篇番號も兩冊による。
- (2) 本節では主以下の先行研究を参照した。余嘉錫『四庫提要辯證』（中華書局、一九八〇年）五八七―五九二頁、淺野裕一『黃老道の成立と展開』（東洋學叢書、創文社、一九九二年）第三章「『六韜』の兵學思想」（四九六―五一九頁）、解文超『先秦兵書研究』（上海古籍出版社、二〇〇七年）。
- (3) 『後漢書』徐璆傳と左雄傳の注に引く謝承『後漢書』に「太公六韜」、「三國志」蜀書・先主傳の注に引く「先主遺詔」に「六韜」の呼稱が見える。
- (4) 全て兵書類で、『太公陰謀』『太公陰符鈐錄』『太公金匱』『太公兵法（二種）』『太公伏符陰陽謀』『太公三宮兵法』『太公書禁忌立成集』『太公枕中記』。
- (5) 元豐三年（一〇八〇年）四月に『六韜』を含む七書を校定し刊行することを命ずる詔が發せられた。『續資治通鑑長編』卷三〇三（中華書局標點本、二〇〇四年）七三七五頁。
- (6) 河北省文物研究所定州漢墓竹簡整理小組「定州西漢懷王墓

竹簡《六韜》釋文及校注》(『文物』二〇〇一年五期) および同「定州西漢懷王墓竹簡《六韜》的整理及意義」(『文物』二〇〇一年五期)を参照。引用・編號は全て「釋文及校注」による。

- (7) 『群書治要』では、文韜にも武王・太公問答の佚篇(「武王問太公曰、桀紂之時、獨無忠臣良士乎。」)が含まれ、また現行本では龍韜の論將篇・選將篇が、武王・太公問答のまま武韜として載せられているので、この区分は異なる。

- (8) 押韻の判斷は上古音の韻部により、その認定に際しては主に郭錫良『漢字古音手冊(增訂本)』(商務印書館、二〇一〇年)によった。『六韜』の押韻箇所については、江有誥『音學十書』(中華書局、一九九三年)「先秦韻讀」と、龍宇純「先秦散文中的韻文」(『絲竹軒小學論集』、中華書局、二〇〇九年)二四三―二四六頁を参照。後者は狀況説明問答中の押韻も指摘している。

- (9) 嚴可均『全上古三代文』卷七の「陰符」の佚文に關する注を参照。また周鳳五『敦煌本太公家教研究』(明文書局、一九八六年)七二―七五頁にも例を擧げての指摘がある。

- (10) 幼學の會編『太公家教研究』(汲古書院、二〇〇九年)、鄭阿財・朱鳳玉『敦煌蒙書研究』(甘肅教育出版社、二〇〇二年)、周鳳五『敦煌本太公家教研究』(注(9)前掲)を参照。

- (11) 船木勝馬「『明心寶鑑』雜考」(『中央大學人文研究紀要』第18號、一九九三年)の索引、王三慶『敦煌類書』(麗文文

敘述形式から見た太公書『六韜』の成立について(鈴木)

化事業股份有限公司、一九九三年)の索引篇及び校箋篇を参照した。

- (12) 『新集文詞九經鈔』のP. 366vに引用される「太公」には「六韜」と重なる表現があるが、この部分は體例の違いなどから『新集文詞九經鈔』ではない可能性がある。伊藤美重子『敦煌文書にみる學校教育』(汲古書院、二〇〇八年)三一五―三一八頁参照。

- (13) 『應機抄』の性質は王三慶『敦煌類書』(注(11)前掲)八五・八六頁参照。同書錄文篇の番號で、01-123「蓬生麻中、不扶自直、白沙投泥、不染自擊」が「太公家教」と、01-226「鷲鳥將擊、必卑飛斂翼、虎狼將擊、必弭毛誅伏」が「六韜」武韜・發啓と、01-004「夫危」(「明」の誤)者見危於無形、智者慮禍於未萌」と01-123「道自微而生、禍自微而成」が「金匱」佚文と重なる。特に121と122は一つの「太公曰」の中で連續する文となっている。『應機抄』でのその他の「太公曰」の引用は諸太公書にも『太公家教』にも見えないものだが、やや政治論寄りながら、君臣・父子關係を類比的に語る内容が多く、折衷的と言える。

- (14) 羅家湘『《逸周書》研究』(上海古籍出版社、二〇〇六年)は武稱、允文、大武、大明武、小明武、武順、武紀解を兵家言とする。その一部を、陳逢衡『逸周書補注』は「太公兵法」の佚文とし、孫詒讓『周書斟補』は「周書陰符」の遺文とする。

(15) ここで「最古層」とするのは、李學勤氏の諸研究に基づき、羅家湘氏が注(14)前掲書において「史書」として分類する克殷、世俘、商誓、度邑、作雒、皇門、嘗麥、祭公、芮良夫の諸篇である。

(16) 大西克也「上海博物館藏戰國楚竹書《曹沫之陳》譯注」(上海博楚簡研究會編『出土文獻と秦楚文化』第三號、二〇〇七年) 参照。

(17) 木牘の篇名欄は三行五列にわたるが、特に最上列は殘缺が甚だしい。『銀雀山漢墓竹簡「壹」』以來、現行本の十三篇に當たる篇名が綴られていたと考えるのが一般的だが、李學勤『《孫子》篇題木牘與佚文』(『簡帛佚籍與學術史』、江西教育出版社、二〇〇一年)のように、十三篇以外の篇名が入っていたと考える説もある。

(18) 李零『《孫子》十三篇綜合研究』(中華書局、二〇〇六年) 九八—一〇二頁に「(己) 吳王、孫武《九地》問對佚文」としてまとめられる佚文(第23條は除く)である。

(19) 押韻の問題については龍宇純「先秦散文中的韻文」(注8前掲) 二二—二頁参照。『通典』卷一五九の「死地勿攻」での引用(李零氏の第20條)は、九地篇の「(一)地」を明示せず、上古音での押韻も整っていることから、漢代以前の由來を持つものと思われる。

(20) 睡虎地秦簡との語彙の共通性などから、『墨子』のこれらの諸篇を秦代の成立とする説が現在には有力である。銀雀山漢

簡「守法守令等十三篇」の守法篇にも『墨子』と一部重なる内容が見られる。李學勤「論銀雀山簡《守法》《守令》」(注(17)前掲書所收)を参照。

(21) 文韜・兵道篇にも狀況説明問答は見られるが、後半部分だけであり、前半とは全く内容が異なっている。兵道篇は文韜の末尾に位置し、また文韜中唯一、武王との問答の篇であることから、この狀況説明問答は後に付加されたものである可能性が高い。

(22) 『宋會要輯稿』一一四冊・選舉一七による。『續資治通鑑長編』卷一六一・標點本三八九三頁では「陰陽」を「陰符」に作る。

(23) 當時の諸子學派の人々が、假設された話者による説得力の變化に對し十分に自覺的であったことは『莊子』寓言篇からも明らかである。